

「女性論」と「危険な関係」

—— ラクロとルソー ——

《序》

「女性の教育について」という表題のもとに、ラクロの未刊の論文が集められ、一九〇三年に出版された。未完成の三つの草稿よりなり、最初の草稿の日付けは一七八三年、「危険な関係」出版の翌年である。第一の部分はシャロン・シュール・マルヌのアカデミーによって提出された問題「女性の教育を改良する最上の方法は何か」、に答えたものであって、ラクロは、男女の不平等社会においては女性の教育を改良するいかなる方法も存在しない、と結論する。第二の部分は「女性と女性の教育について」と題され、十二章に分れる。はじめの九章は「自然状態における女性」の記述であり、反対論者への批判をはさんで、後半は、社会状態における「自然」からのさまざまな逸脱の過程と結果が示される。第三部「女性の教育について

松 本 勤

の試論」では読書の効用が説かれるが、重要な問題はすべてははじめの二論文につきている。全体を通じて、教育論としての要素は乏しく、一つの社会論としての女性論であるから、われわれの研究では「女性論」と略記することにする。

「女性論」の中心部分は「自然状態における女性」と「社会状態における女性」の対比を軸として展開する。自然状態においては、人間は平等であり、自由と力と健康とをもっていた。人間が社会生活を営むようになっていらい、強者の弱者に対する圧制が必然となった。強者である男性は暴君となり、弱者の女性は奴隷となった。不平等な暴力に対抗するために、女性はいくつの術策を考え出した。しかし、もはやそこにあるものは、自然から遠くへだたつた歪められた人間関係ではない。奴隷の身分のあるところ真の教育は存在しない。女性の教育を可能にするものは革命しかない、とラク

ロは言う。「このような革命は可能であろうか。それに答えるのはあなたがた女性だけだ。なぜなら革命の可否はあなた方の勇氣にかかっているのだから。」

未完の論文であるが、われわれはここに一貫した思想、一貫した社会批判を見出すことができる。とりわけ著しいのはルソーの影響である。

(1) De l'éducation des femmes. Piétade. p. 405.

以下、F. P. と略記する。

「女性論」をどのように扱うか、によってラクロ解釈は二つの陣営に分れている。われわれはすでにロジェ・ヴァイヨンとセイラスを対比させることよつてこの点を指摘した。問題は、セイラスのように、「女性論」を全く捨象して「危険な関係」を論じることが妥当であるか否かである。ほぼ時を同じくして書かれ、しかも仔細に検討するならば、明確に相通する諸点の認められる二つの著書が無関係であるとするには、それ相応の理由がなくてはならない。ラクロには二人のラクロがいる。ルソーの弟子としての「女性論」の作者、アンチ・ルソーとしての「危険な関係」の作者、両書はそれぞれのラクロの産物である、という見解は問題の提出ではあつても解明とは言えないであろう。ルソー的な論文と反ルソー的な小説とが同一時期に書かれていることにこそ問題がある。この小論は「女性論」を中心とするラクロの他の文章を分析しながら、「危険な関係」の解釈、歴史的位位置けを試みたものである。全体を三章に分ち、まず、「女性論」をルソーと比較しながら分析することによりラク

ロの基本的な立場を明確にする(1)。次に、「女性論」と「危険な関係」の結びつきを論じ(2)、最後に、前二章の結論の上に立つて、「新エロイズ」を念頭におきながら、小説の全体的な解釈を試みる(3)。ルソーとしばしば比較するのは、その思想的影響が顕著であり、ルソーとの対比を通じて、ラクロのきわめて重要な面を把握しようと考えたからである。

(1) Jean-Luc Seylaz p. 91

(I)

「女性論」を読んでまず思ひうかぶ名は、ルソーとエルヴェシウスであろう。ラクロも彼らと同じく、社会を徹底的に人為と解して、社会論をあるいは教育論をつくることを目指した、と思われるからである。快楽と苦痛を人間の行動原理とする点、神の觀念が存在しない点、全体を通じて感覺論的唯物論に立脚している点、などむしろエルヴェシウスに近い。しかし、きわめて重要な点において、ラクロは明確に反エルヴェシウスの立場をとる。ルソーは amour-propre と amour de soi-même とを区別し、前者は「社会の中で生れる相対的で人為的な感情にすぎず、それは各個人を他のだれよりも自分を重んじるようにしむけ、人々をそのかせてたがいにあらゆる悪を行わせるとともに、それは名誉の眞の源泉なのである」(2)としてこれを否定する。エルヴェシウスにあつては、光榮の欲求や名誉心は情熱と行動の原動力として肯定され、その個人的欲求を公共の利益と一致させる功利主義的教育論が展開される。

エルヴェシウスとルソーとを分つ点は、また前者とラクロとを分つ点でもある。「女性論」全編を通じてはげしく否定されるのは「社会の中で生れる相対的で人為的な感情」である。徹底した否定を支えているのが「自然状態」のイメージにはかならない。このイメージをラクロはルソーから受けとった。ルソーの影響はラクロの思想の核心に至っている。

- (1) ラクロがエルヴェシウスを読んでいるのはほぼ確実である。
(cf. Sur l'Eloge de Vauban. Pléiade p. 546) 性格的にもむしろルソーからは遠い。しかし、エルヴェシウスの特定の「影響を考えるよりも、むしろ当時の進歩的な知的集団の一般的な影響下にあったと見る方が妥当であろう。」
- (2) De l'inégalité parmi les hommes. Classiques Garnier. p. 118. 以下、Inégalité と略記。
- (3) たとえば、「人間論」第三巻第四章

ラクロの自然状態の記述にはルソーとの一致を示す箇所が多い。そのいくつかを例記しよう。

《ラクロ》

「文明人は、生まれおちると同時に、産衣にびったり身を縛られてしまふ。両親はすでに子供のために用意されている永遠の奴隷状態に子供を慣らそうとしていようである。(第三章

《ルソー》

同様の意見。「子供が最初にもらうのは鉄鎖である」。
(Emile. Classiques Garnier. pp. 14-5)

P. 407)

母性愛に関して。「母乳は母子を結ぶ自然のきつなである。」母親みずから嬰兒を育てるべきこと。(第三章。P. 408)

子供が食物をさがすことができるようになる」と、「必要が母と子の間にうち立てた結合の契約は、必要の消滅とともにここに終りをつける」。彼らはもはや「出合っても見分けがつかない」。(第三章、P. 409—10)

人生の第二期のよび方について。ラテン語では infans と puer に分れているがフランス語では enfance 一つである。だから第二期を指す語として enfant を用いる。(第四章、P. 410)

母親が母乳を与えることの重要性。乳母にあずけることの害。(Emile pp. 15-7)

必要によって母親は子を哺乳し養育した。「子供たちがその食物をさがすだけの力を持つようになるや否や、さつさと母親を棄て去った。……やがてかれらは相互に見覚えることすらないというほどになった。」
(Inégalité. p. 52)

「エミール」第二篇冒頭。同じ語、infans, puer, enfant を用いて同様のことわりをしている。(p. 59)

自然状態における男女。「彼らは何の面識もなく結ばれ、かつ一瞬の後にも互に別れてもはや相見ることもないであろう」。(第六章、P. 417)

「男性と女性とは出合がしらに機会のあり次第、欲望のおもむくままに偶然に結合し、……別れるときも同じく至極簡単に別れた」。(Inégalité, p. 52)

死の恐怖なし。「この最後の瞬間は他の瞬間と同じく平静である。彼女は死ぬというよりはむしろ終るのだ」。(第七章、P. 420)

「かれらはついには、かれらのいなくなることを誰もが気づかないうちに、そしてほとんどかれら自身も気づかないうちに消えてなくなる」。(Inégalité, p. 44)

自然の人間の「感受性のゆたかな魂は、憐憫 (pitié) と愛情とを知っている」。(第九章、P. 426)

憐憫の情 (pitié) については Inégalité, P. 58 参照。

右にあげた外も、ルソーとの類似を示す部分はきわめて多い。⁽¹⁾ ラクロはつねに現実の不幸と対照して、自然状態における人間の幸福を説く。彼らは現代の子供たちのように束縛をうけることなく成長する。思春期の快楽は「現代の社会、教育制度が必ずそこに混入する様々な不幸によって少しも毒されなかった、ある純粹である

と同時に激しい快楽」である (P. 42)。想像力のもたらす恐怖や不安もない。自然的な感情に従ってお互に妨げることのない「動物の中の最上のもの、最も幸福な存在」である (P. 426)。

(1)、とくに「不平等論」との間に多く指摘される。数例を加える。自然状態において想像力に由来する不幸が存在しないこと。恋愛における精神的なものは、「社会の慣行から生れる後天的な感情であって、この感情を、婦人たちは、自分の支配力をうち立て、本来服従すべき性を優勢にするために、非常な巧妙さと注意とをもって讚美する (Inégalité p. 61)」こと。さらに、不平等社会の成立の問題。社会状態における人間の感情や価値観の変化 (価値と美の観念の獲得、恋愛と嫉妬のめざめなど) 等々に関し⁽²⁾。

ラクロは「女性論」の中で、ルソーの文章を二度引用している。それらは共に「女性論」の性格を知る上で考察するに価する。

第一の引用。自然状態の女性の記述をはじめに於たつて。「われわれがこの主題に関していかなる研究にはいりこもうと、それは歴史的真理ではなく、ただ臆説的で条件的な推理だと思わなければならない。そうした推理は、事物の真の起原を示すよりも事物の自然を示すのにいつそう適切なのである」⁽¹⁾。この文章は、しかし、両著の中で必ずしも同じ意味を担っているわけではない。ルソーに於ては、それは聖書の記述と矛盾することの回避であり、自然状態は単に理想的仮定ではなく実在概念でもある、という解釈が可能である。⁽²⁾ ラクロにおいて聖書との衝突が念頭にあったか、ルソーのよ

うに「自然」の實在性の信念を持っていたかどうか、きわめて疑わしい。ルソーはビュッフォンや旅行記などをおびただしく利用して「自然」を歴史的事実として実証的に確認しようと努力した。ラクロは事実問題よりも、文明と自然のいづれが幸福かと問うに急である。「もし幸福ならば動物に優ろうと劣ろうとどうでもよいではないか (F. P. 425) 」。『不平等論』では、l'état sauvage あるいは l'état primitif が、しばしば l'état de nature と等置される。ラクロにおいては「野蛮状態」と「自然状態」を明瞭に区別することが要求される。ルソーは現在においても野蛮人に「自然」の近似的存在を認めたが、ラクロにとって野蛮状態は単に社会状態の一形態であるにすぎない。また、理想的教育において「自然」の残存を可能にする、ルソーの自然の善性の信念に近いものを、ラクロの文中から見出すことはできない。ルソーは「エミール」や「新エロイズ」を書いた。ラクロが書いたのは「危険な関係」である。ラクロには肯定的人間像を展開させる素地はなかったのではないか。彼にとつて、自然は、ルソーによつて触発された現実批判の支柱としての理想概念であつた。

(1) Inégalité, p. 40, F. p. 407

(2) 「ルソー研究」所収「ルソーの哲学」参照 (p. 51)

第二の引用。自然状態において人間は本能的に家族集団を構成する否かに関して。ラクロは『不平等論』より長文の引用をしてヴォルテールに反対する。——妊娠後に男女が同棲する理由は一つもな

い。男は自分の行為の結果を気にかけないし、男も女もその同じ相手が必要とほしない。「一方は一方へ、もう一方は他方へと去り、九ヶ月後にはかれらが互に識つていたという記憶をもっているらしい様子もない」⁽¹⁾。ここからラクロは次の主張をくりかえす。自然状態では人間は孤立している。家族はその後に生じた人為的な社会形態である。ヴォルテールの「自然」観は正しくない。

ラクロによつて反論されたヴォルテールの文章は次のようなものである。「人間は一般に山猫のようにひとりで生活するように出来ており、自然を荒廃させたのは社会である、などという驚くべき逆説」は、悪ふざけをする連中のエスブリの乱用の結果にすぎぬ。「どんな動物もそれぞれの本能は、理性によつて強化され、人間の飲食に導くと同様、社会に導く」。もしも自然状態における無関心が自然の本能であるならば、父親は母親を見捨て、母親は子供を見捨てて「地上存在する人間の数は肉食獣の数よりも少くなるであらう。」 (F. pp. 429—30)。

ラクロは云う。社会化され改変された現代人の本能から解釈してはならない。自然の本能は、われわれの諸制度の重圧のもとで窒息させられたのである。母と子と父の結合は「自然の本能の必然的な衝動」ではなく「諸制度の結果」である (P. 431)。ラクロのヴォルテール批判は、人類社会が「自然」によつて成立するとして、自然から人為へのスムーズな移行を考えるか、それを否定して社会をあくまで「人為」であると考えるか、という社会観、文明観の基本的対立に関係しているのである。

ラクロによって引用されたルソーの文章は、ロックの統治論の一部分(第二論文、第七章、七九―八〇)を引用し、これを批判したものである。ロックは、人類にあつては「雄と雌とが、ほかの生物が維持しているよりも長い期間、社会をつづけていなければならぬ」理由が本来ある、と主張する。「創造主は、人間に対し現在にと同様、未来にもそなえるのに適した性質を与え、かくて、人間の社会が他の動物の雄と雌との社会よりも長くつづくように」望んだ。それは、これによって「男子と女子との生産技術がいつそうに刺戟され、かれらの利益がいつそう一致し、その結果かれらが子供たちのために貯えを作り、かれらに財を残すようにするため」である(Inégalité pp. 113-4)。

社会状態が自然状態と基本的に対立することなく、財産権が重視される、ロックの直線的な進歩主義の文明観は右の引用からもうかがうことが出来る。ルソーはロックに対して、物的なことがらに関しては道徳的な証明はたいした力を持たない、として四点をあけて物的に反証する。ラクロが引用したのはその一部分であるが、根本的にはルソーとロックの社会観の対立であることは云うまでもない。ラクロ対ヴォルテールはルソー対ロックと同じ構造を持っている。ラクロがルソーの革命的社會観をどこまで自分のものとしているかは明かではない。しかし、「自然」を反社会の支えとし、社会と社会における人間の墮落を徹底的に非難し、現実の全面的な否定を行ったことは確実であり、「女性論」の最も重要な点もここにある。

「女性論」第十章、「社会のもたらした最初の結果について」、

は右の観点を確認するであらう。ここでもルソーの影響関係の推測されるテーマが展開する。「自然は自由な存在しかつからない。社会は暴君と奴隷しかつからない(P. 433)」。ラクロはこの主題を女性の観点から扱う。彼の論文の大きな特色といえよう。人間ははじめは孤立していて自由であった。しかし、力において強者である男性は女性を征服し、征服者の権利をきびしく行使した。だから、その結果である家族は男女の不平等形態であり悪しき社会である。ヴォルテール批判の意味は明らかであらう。男性は所有の觀念を女性にまで拡張する。女性は事実上の奴隷になりさがる。――「一般に権利の起源とはこのようなものである(P. 434)」。

(1) Inégalité p. 116. F. P. 430

(2) エルヴェシウスにせよルソーにせよ、女性観は一般に男性中心である。ルソーのやさしく家庭的な女性のイメージは、力強くたくましいラクロの女性像とは遠く隔っている。

「女性論」の最初の部分で、ラクロは、人間の諸能力を感性的能力と知性的能力とに分ち、前者に由来する教育を身体教育、後者を精神教育と名付け、両者の必要を説いた(「男と女」)。しかし、「女性論」で展開するのは主に感性的能力の問題であつて、知的あるいは道徳の人間の問題をラクロが積極的になぞ考えていたか、われわれはうかがい知ることができない。第三部で、ラクロは、読書による知的訓練を女性にすすめているが、その内容は、独自の知的女性像をわれわれに思いうかべさせるようなものではない。ラクロはまた、教育を、個人の諸能力の発展とその社会的有用性の方向にそつた

展開、と規定した(P. 403)が、社会的有用性とは何を指すか、は不明である。したがって、いかなる市民教育が可能なのかも明らかではないし、ラクロが熱望した「革命」の内容もまた不明である。

さらに、「自然」から「社会」への移行は墮落としてとらえられるが、その後の歴史過程についてはほとんど言及されないため、それがいかなる価値的評価をうけるのかは明瞭でない。未完の草稿であることをさしひいても、「女性論」は、社会論としても教育論としてもルソーの著作に匹敵するようなものではけつしてない。それは、ルソーの思想のある一面の、ラクロ流の、心理的観点を軸とした幸福論的展開である。

しかし、「女性論」は、この時期のラクロと「危険な関係」とを基本において理解させるに十分な論文である。社会において疎外された人間とその反対の極としての自然、という対照に焦点があるだけに、ラクロの現実社会に対する不満はいつそうむきだしにあらわれているのである。叫びはときにヒステリックでさえある。人間はもともとっと良いものであった。幸福であった。現実の中に充滿しているのは作為と不幸ばかりである。

「人間は集団生活を営むようになってから休息を失ってしまった。自然の人間は彼のような欲求が満されるとすぐ眠る。文明人の場合は同じではない。文明人は社会契約の履行に心を配らねばならない。彼はもはや眠りに身をまかせはしない。……常に仲間の企てを警戒し、活動するためではなく、いざという時に活動できるように心を配っている(P. 435)」。彼らは想像力に支配されて過去と未来とに頼り「現在の瞬間における感覚を押し殺して」生きてい

る。「あなた方の中で、不安も嫉妬も後悔も義務と単調な生活の苦痛にみちた倦怠もなく、常に快楽を享受してきた人が一人でもいますか(P. 417)」。

われわれはラクロの中に、大革命前夜のかくしきれぬ不満を抱いた一人の知識人の姿を見る。ラクロは、その現実批判の糧をルソーから受けた。ルソーの大革命への影響の一つの典型をここに見出すのは、きわめて興味深い。

(Ⅱ)

「女性論」と「危険な関係」をむすぶものは、社会状態における人間の墮落、歪められた自然、というテーマである。この基本的認識は「危険な関係」においても変らない。しかし、その具体的なあらわれとして、両書がとくに密接な対応関係を示すのは、「女性論」第二部後半で展開される文明社会における男女の諸関係の部分である。すでに、西川、天羽の論文で委細はつくされたと思うので、ここでは略記するにとどめる。

自然状態における人間の平等は、社会状態への移行によってくずれる。強者Ⅱ男性の、弱者Ⅱ女性に対する圧制がはじまる。野蠻という社会の初期の段階においては「圧制と輕蔑が女性の分け前」であった。しかし、長い経験から、女性は「力に術策を對抗させる」ことを、「女性の唯一の手段は魅惑すること」であることを知った(P. 435)。その時から、ラクロにおける男女の歴史の新しい時期、「男性と女性の間に存在するたえざる戦いの状態(P. 436)」がはじまる。ターネルによって「男と女のたえざるたたかい」と評

された「危険な関係」は、男女が術策のかぎりをつくすこの状態の正確な描写にはかならない。

歴史のこの段階においては、人間の存在のありかた、とくに男女間のそれが強く変化をうけ、著るしい特徴を持つに至ることが指摘される。

まず人間の欲望そのものが変化する。欲望は、人間がもともと持っていたその単純な姿から、人間相互の関係の中において、相手が示す態度と自分の想像力の作用とによって心理的に変形される。それは対象そのものに素直に働きかけるのではなく、想像力によって自分のつくったあつた幻想にむかつて働きかけるのである (P. 436)。変形された欲望は「危険な関係」の主人公たちの行動を特徴づけるものである。彼らは「快楽機械」にすぎぬ異性を軽蔑する。ヴァルモンは「容易にみたされる希望」を欲しない。「ひとたまりもなく手に入るような女」セシルは彼の相手ではない(第四信)。単なる快楽追求ではない障害によつてたかめられる欲求は、彼のツールヴェル夫人に対する攻撃の仕方においても特徴的である。こうした欲望形態は、セイラスが、「危険な関係」の本質的特徴の一つとしてとりあげたエロチスムにはかならないが、それは、「女性論」においては、文明社会における人間性の歪曲として否定されているのである。

欲望の形態とともに、美と愛、すなわち両性間の主要な価値観念が「自然」を離れて変化する。女性が男性の想像力と欲望をあやつることができるようになると、美(「選択の美」と愛(「排他的な愛」)がうまれる。さらに、美と愛は嫉妬をうみ、「この三つの幻想

は今日ではついに我々の情熱の唯一の源となつてしまった(P. 436)」。この三つの幻想の上にくりひろげられる男女のたたかいを、われわれは「危険な関係」の中に見いだすであろう。

このように理解された美や愛(「恋」)が、ラクロにとつて十分に肯定的な価値を担うものでないことは当然である。恋は社会状態において歪曲された「排他的な恋」であつて、「自然状態における人間が所有していた全財産を売り払つて手に入れた」代償物にすぎない(P. 417)。美意識の変化も価値の転倒を示す。自然の人間は美を認識することなく美を享受する。官能的感觉が両性をつなぐ唯一のきずなであり、女性の美の要素としてラクロは「みずみずしさ、体つき、力」をあげる。文明の段階において、美は観念的な構築物となり、容貌が女性の主要な装飾となる。美は想像力とそれを発動させる装飾によつて左右される。「我々の風俗にあつては、美は我々の見解の永遠の玩弄物であつて、我々が醜いとよぶ女性が、我々が美しいという女性から、容易にしかも満場一致で彼女たちをとりまく男性の讃辭と欲望をうばいとることができるといふまでに変化するのである(P. 443)。「危険な関係」において、主人公たち(とくにメルトイユ夫人)がこのような価値の転倒を代表していることをあとづけることは、困難ではない。「女性論」と結びつけて読むかぎり、彼らは「社会」をつよく体現しているために、ラクロによつて否定されている人物なのである。

(1) Martin Tunnell: The Novel in France. p. 54.

ラクロは想像力の幻影によつて生きる生活を否定した。そこには

動物的感覺的生の段階において人間が持っていた幸福はない。ラクロがしばしば描く感覺的生は、実現可能な理想として存在したのであるうか。そうではあるまい。この動物的感覺的生は、「危険な關係」があますところなく写しとっている現実の人間の不自然を映し出す鏡である。これらの歪曲はすべて、人間が「自然」を捨てたことに由来する。社会が必然的にそれを課したのである。

ラクロにとっては、社会の生活とは社会の羈絆の中でもよくことであり、その結果、人は「そこから逃れようと試み、彼の仲間の上にその重荷を投げ返そうと努める (put back)」。社会は人間にエゴイズムと不平等を強制する。そこでは人間の自然な発展はのぞめない。不幸と惡徳の源泉はここに求められる。ラクロにおいては、惡が社会との相關關係において把えられていることに留意しよう。

「危険な關係」で扱われている風俗や人間性の問題が根本的な社会批判につながっていることは「女性論」と對置するならば明らかである。もつともこうした解釈が小説のみからは容易に引き出せぬことは事実である。これは、たしかに、この小説の弱さではあつても、解釈の不当性を証するものではない。

ところで、「危険な關係」において、作家の現実否定を體現しているメルティユやヴァルモンが、一流のプシコロークであり、自己の行動原理を持ち、独得の主体性を持った人物であるのは何故であらうか。われわれはこの小説における作家と作中人物の關係を知るために、この点を明らかにしておかなければならない。

メルティユ夫人について。第八十一信は彼女が自己告白をする唯一の手紙である。それは、作者の意図を知る上においてやはり重視されるべきである。彼女は若いころから、偶然や習慣に左右されずに、自分で考察し創造した主義によつて生きることをよしとしてきた。まず周囲の人物と社交界という社会を觀察し、そこで巧みに生きるためにはどうすべきか、を考えた。それは、この社会における価値法則を自由に扱いうるようになること、すなわち、まず利害關係を適確に把握し、つぎに自己の對外的表現を意のままにできるように自己規制をして、「外へ示して利益になる考え方しか表わさない」ようにすることであつた。彼女は社交界の中に生き、その利害法則を徹底して自己のものとした。彼女の「惡徳」はこの法則の徹底にはかならない。それは「惡の精神」とよばれる神秘的なものではない。ラクロは、メルティユ夫人を描いたことの正当性を主張するために、女性が自己の利益のために行う惡行を列挙して云う。「現実にかういったことがないのなら、私が書いたことは間違いだ。しかし誰が毎日行われている現実をあえて否定しえようか? (Ne dis pas ça)」メルティユ夫人は、こうした現実から作家が引き出した否定の典型なのである。

メルティユ夫人が自ら語る行動原理のいま一つの重要な問題は、男性とのたたかいである。彼女自身、「女性のために復讐し男性を征服するために生れた私」という。この点はすでに詳述されたので省略する。ここでも「女性論」との対応は明確である。

ラクロは「女性論」で次のように云った。社会の現状において、女性がそのおかれている場所から脱出を試みることによつて非

常に危険な存在になるであらう、と (P. 46)。ここで述べられているのは、よき教育によって自己教育し、善の方向にむかつて反社会的となる女性である。しかしラクロはこのような人物を小説では描けなかった。彼が描きえたのは、社会が要求する人為とエゴイズムの徹底によって普通の女性の地位から脱出したやはり危険な存在である女性である。彼女が世間的なモラルと対立しているのはこの徹底によってである。なぜなら、現実の冷徹な人間関係の認識は、「美德」という社会の安易な合理化の正体を見抜き嘲笑するからである。だから彼女は修道院教育を軽蔑し、いわゆる貞女たちを笑う。彼女が攻撃するのは世間的モラルだけではない。一般に人間的な信頼が彼女には不可能なのである。恋と恋人を混同することは神に捧げるべき尊敬を司祭に捧げるようなものだ、と彼女は云う。恋とは快楽にすぎぬ、人格的愛などは存在しない。「女性論」における現実認識の徹底した表現をわれわれはまた見出さないのであろうか。われわれは、しかし、メルトイユ夫人の反社会的側面を過度に評価することを慎まなくてはならない。彼女が社会悪の一つの表現であること、および彼女の行動は現存の社会秩序の中で女性が自由を獲得しうる唯一のものであること、において作者が彼女を描くことによって現実を批判した積極的な意味は認められる。しかし彼女には、現実社会に対する根底的な反抗意識は存在しないし、作者の反社会的立場をうつしてもいいない。メルトイユ夫人が作者によって激しく否定された女性であることは、リコボニ夫人宛の手紙におけるラクロの度々の証言をまたずとも明らかである。彼女に対して、ラクロ自身に属する現実分析の能力が与えられているのは、彼女がも

っともよく現実を知っているからであるが、その暴かれた現実の価値係をそのまま自己の原理とすることによって、彼女は、作者によって最も強く否定されているのである。

- (1) メルトイユ夫人が作家の思想を代弁し、従って「女性論」と一致をみるという現象は容易に指摘される。たとえば第四百四十一信、ヴァルモンの恋愛の分析をみよう。

メルトイユ夫人の独自の地位にくらべると、ヴァルモンは、彼一流の自律性と行動原理を持つとはいえ、より平凡で *love* の一般的なパターンを出ない。ヴァルモンの一種の主体性は、彼がプシコログであること、およびその快楽がやはり感覚よりも想像力に結びついているエロチスムに由来している。そしてこの場合、両者は別個のものではない。(プシコログとしても、ヴァルモンはメルトイユ夫人に劣る。後者は前者の心理を適確に把握しているが、逆はそうではない。)

「犠牲者の方では一切が情愛の念で感動しているにもかかわらず、一方彼ら二人の感受性はどちらも全く無感覚になる」とソーニエは書いている。⁽¹⁾ エロチスムの帰結としての無感動、余裕、これが彼等をして被害者の心理と自己の立場を冷静に分析することを可能にする。彼らの魅力の多くは、彼らが作成する心理の実験報告の手腕に依存している。その分析はターネルの指摘するように「何をするためにはどのように行動すべきか」、という行動と直接むすびついた分析である。⁽²⁾ この方法はもはや前世紀のものではない。ヴァルモンは、相手の表情やしぐさなどの身体的変化をつぶさに観察

し、それに基づいて相手の心の状態を分析して、そこから自己の行動を引き出す。メルトイユ夫人は、この関係をさらに利用して、誘惑するための動作を演出する。分析の基本になっているのは身心の相関関係である。身心相関論的分析は「女性論」においても見出される。⁽³⁾

「危険な関係」において作家は彼の心理分析能力を否定的人物にしか与えることができなかった。主人公たちは、そのすぐれた諸能力を彼等の否定性のゆえに獲得する。これはこの作品と作家の間に存在する逆説的關係を端的に示している。われわれはここにこの小説の過渡性の一つのあらわれを見ることができよう。

- (1) ソーニエ「十八世紀文学」、白水社 P. 113
(2) M. Turnell, op. cit. p. 54.

- (3) たとえば、十二章、魂の動きや観念の数と表情まなざしとの関係。

(III)

われわれは、「女性論」と結んで考えることによって、「危険な関係」を反社会的の思想を持った作家による現実批判の書である、とみてきた。根本的に反社会的立場から小説を書いた点において、ラクロの文学は前世紀の文学と明瞭に対立する。一方、十九世紀前半の小説とも明らかに異った点を持つ。「危険な関係」の解釈の困難は、一つには、その過渡期的な性質にあるとみてよい。この過渡性を検討することは小説の正しい理解につながるであろう。

十七世紀においては、ボワローの美学が代表するように、芸術は

自然の模倣であり、この自然は、真⁽¹⁾美と等置されるとともに、「ある特定の文明状態」と等置された。一定の社会が、永遠化されて、真と美の価値規準を内包する自然と考えられるのである。その結果、真偽はむしろ vraisemblance の問題であり、モラルの善悪は bienséance という趣味的問題に転化する。芸術は、根本的に反社会的であることはなく、社会の価値体系の表現であった。とくに小説は二流のジャンルに属する「なぐさみもの」の位置を占めるにすぎなかった。

ラクロの「自然」が十七世紀の「自然」と対立するものであることは云うまでもない。多くの十八世紀人とともに、それは現実批判のよりどころであり、しかも、ルソーを継承してきわめてラジカルなものであった。既存の価値体系は全面的な批判をうける。

ラクロは人間と社会の把握の仕方においても、十七世紀のそれとは根本的に隔っている。前世紀の絶対的把握とは異り、環境との相関関係において人間を相対的にとらえようとする方向を、彼は明確に指示している。たとえば、美の観念は、ラクロにあつては、時代と民族に応じた相対的なものであり、「美は見解の多様性に応じて変わり、その享楽に与える価値の多少に従って変化するべきもの」であつた (F. P. 432)。

さらにわれわれは、ラクロがいまだ未成熟であつた小説というジャンルに多大の価値と信頼を与えていたことに注目しておこう。⁽²⁾ 小説は演劇とも歴史とも異なる役割を担う、と彼は云う。演劇と比較すると、小説は、人物性格についても感情や情熱についても細部を描きうるがゆえに、演劇においては不可避免的に弱められる真実をより全

的に与えることができる。歴史と比較するならば、小説はふつうの民衆を描きうるから有利である。歴史と演劇は人間の不完全な認識しか与えない。その空白を埋めるのが道徳の書物であり小説である。だから小説家にまず要請されるのは、人間の精神と心情についての認識である。ここには小説を「なぐさみもの」と考える従来の小説観は全くない。それはすでに小説というジャンルの特性を自覚した言葉である。ラクロが小説の方法や文学観において、前世紀の作家たちの伝統の下にあると考えられる場合がしばしばあることは事実である。人間の精神や心情の研究、という主張も表面的には十七世紀の文学者と相通じる。しかし絶対的、普遍的人間把握から、社会的観点のもとにおける相対的、個別的把握へと移行している以上、その実質的内容は同じではない。

ラクロは、個々の概念の内容においては古典主義美学とすでに異質のものを示していた。しかし、全体として、そのワク組みを全く超えていると断することはできない。「自然の模倣」と、ルソーによって示されそれを取ってかわることになる「創造」の原理とを対比させる場合、あくまでも「自然を忠実に描く」ことを主張したラクロは、むしろ前者に近い。かくして、ラクロは反社会の位置を保持しながら現実を決して離れないという立場をとる。しかし現実とは全面的に否定されるのであるから、現実を「忠実に描く」ことによっては反社会的自己を示すことはできない。問題は、ラクロの反社会の自我がどのように小説創作において発現するか、という点にうつがっている。

(1) カッシーラー「啓蒙主義の哲学」P. 364 (紀伊国屋書店)

- (2) ラクロの小説観を知るための主な資料は、「リコボニ夫人への手紙」と「小説『セシリア』について」である。共に時期的には「危険な関係」とほぼ等しい。Péiade pp. 500-1
- (3) Péiade p. 688 1111 という自然は理想的「自然」でないことはいうまでもない。「現実」とおきかえてもよい。

あるフィクションのもとに社会的事実をつみあげ、その中で人物を動かし、自分の思想や体験を彼らに託することによって、作家はブルジョア社会の価値法則の中で生きつつこれに抵抗する、という十九世紀前半の小説の典型的な図式と「危険な関係」を対比させてみよう。後者の特異性は明白であらう。それはとくに作家と作中人物の関係において著しい。作者によって最も強く否定される人物が小説の主人公であることは、作品の構造をきわめて複雑なものにした。作家と人物の中にあるのは憎悪であって共感ではない。ジロドゥはそれを嫉妬とよび、ロジェ・ヴァイヤンは復讐とよんだ。⁽¹⁾ 作者の反社会の自我の発露は、人物たちへの同化によって、彼らの社会との対立によって、あらわれはしない。それは、作家が現実の社会をうつした小説の世界に全面的に対立し、またその価値体系を具現した主人公に対立することによってのみ発揮される。ラクロにとつて唯一の方法は、自己と敵対するものを正確に描くことであつた。「危険な関係」においては作者の肯定的分身は一人もない。ツールヴェル夫人は肯定的に描かれた人物であるが、彼女の「美德」は世間的評価に依存し、それはラクロのいれる所ではない。

ラクロの小説のこのような構造は革命前の閉鎖的社会と無縁では

ない。限られた行動可能性。人々はまだ従来の価値体系の束縛を脱して自由に行動することは出来なかった。行動の自由を奪われていたのは誰よりもラクロ自身である。彼が現実体験をつみ重ねる過程は、彼が反社会意識をはぐくむ過程でもあった。「危険な関係」「女性論」「ヴォーバン讃」、いずれもラクロの充たされなかった野心と現実不満の影を濃く宿している。ラクロにとって「書く」とは大きな意味を持っていたのである。ラクロの鬱積した不満が多ければ多いほど、ラクロの否定はそれだけ全面的になった。彼は、「女性論」「危険な関係」の段階にあっては、過去、現在、未来のいかなる社会に対しても合理化を行っていない。ラクロは、現実をすっかり離れることなしには積極的な肯定的人物を書きえなかった、と思われる。

十八世紀にあつて、作家が激しく社会と対立する場合、小説創作にさいして採るべきどのような方法があつたであらうか。一つはルソーの方向。それと対照的なラクロの方向。両者を対比させることによって、「危険な関係」の位置はより明らかにになるであらう。

- (1) これらの言葉の内容をより精密にするためには、ラクロの生涯の個々の事実を十分に検討しなければならぬ。詳細な伝記的研究が待たれるゆえんである。

- (2) ラクロのこの全否定は、厳密な社会科学的思想から帰納あるいは演繹されたものではなく、大きな現実不満の比較的単純な思想的転位である、と私は見る。この全否定は社会状況の変化に応じて容易に転換する性質のものである。革命前のラクロの一時期を特徴づけるものとして受けとるのが妥当であらう。

「新エロイズ」はルソーの夢想的な性格の産物であつた。作家は自己を描き自己の夢をそこに託した。ルソーの理想の人間像がそこにはある。しかし、この小説におけるルソーの自己実現は、現実との離反において可能であつた。悪人が一人も登場しないこの小説では、非現実の理想的世界における人間関係がある。現実とはもとより遊離しているのであるから、根本的な社会的葛藤対立は存在しない。新エロイズは近代文学の創造に大きな貢献をなしたにもかかわらず、近代小説の発端としての評価を受けたのは「告白」であつた。自己のあらゆる要素を告白したルソーが、外部的な諸要素、すなわち社会的現実とからみ合つて、近代小説の構図をおのずから示す結果となつたのである。われわれはそこに社会と対立するルソーの自己意識をより端的にみることが出来る。ルソーはしかし「告白」を小説として書いたのではない。小説「新エロイズ」は近代小説の骨格の半ばを保つにとどまつた。⁽¹⁾

- (1) 「ルソー研究」所収、「ルソーの告白」、「ルソーの文学」参照。なお「告白」の公刊は「危険な関係」出版と同年、おくれること数ヶ月であり、影響関係はない。

モルネ版「新エロイズ」の序文で、モルネはこの小説が一七六一年から大革命までのフランス小説に与えた影響の諸相を詳細に指摘している。「危険な関係」については、ラファイエット夫人、マリヴォーといったの心理小説の系列に属し、ルソーやリチャードソンとはやや異質で無関係である、とされている。とくに心理分析の方法

において、「危険な関係」と「新エロイズ」が対照的な作品であることはここで繰り返すまでもない。

しかし、「新エロイズ」がラクロにとってつねに意識され、重視されていたことは、おそらく事実である。「危険な関係」の、「新エロイズ」のパロディとしての諸性質については、佐々木が今秋フランス文学会で発表したので重複は避ける。

ラクロはすぐれた小説の中でもとりわけ立派なものとして「クラリッサ」「トム・ジョウンズ」「新エロイズ」の三つをあげる。³⁾「新エロイズ」は「小説という名のもとに産み出された作品中で最も美しいもの」とされる。後に述べるように、ラクロは「新エロイズ」を批判するが、その場合も含めて、彼がルソーとその小説に対して深い敬意を払っていることが読みとれる。

さらにラクロがメルティユ夫人に次のように語らせているのも注意を惹く。恋愛を話題にして自分が体験していないことを書くほど困難なことではない。「小説の欠点も亦そこにあります。作者笛ふけども読者踊らずです。尤も『エロイズ』だけは例外です。作者ルソーの腕前も腕前ですが、上のように考えてくると、この本の内容はどれも実録のように思われます。」(第三十三信) モルネによると「新エロイズ」が作者自身の告白であると見抜きた作家はラクロ一人であったという。当時の作家はみな、伝統的な考え方に従って、この小説を「作り話」であると見た。だから、「新エロイズ」の多くの模倣者、同調者は、空疎で美しい恋愛の「作り話」を書いた。ラクロが「小説の欠点」として指摘しているのは、直接的には、当時のこうした一般風潮を指すものであろう。

「新エロイズ」のよき読者であったラクロが意識してルソーを離れるのは、さきに述べたこの小説の特性に關してである。ルソーは現実を離れて理想化された人物を描いた。しかしそれは私のとる道ではない、と彼は云う。

「女性を、女性のすべての長所を持たせて描くに必要な才能を自分が持っている、などと誰が信じていることができるのか！ 女性の力、女性の優雅、女性の勇氣、それに女性の弱さまでも！ 欠点さえも魅力的にするほどのあの美化されたあらゆる美德！ 理屈ぬきの理性、気取りなしの才智！ うちとけた優しさ、謙遜のつましき、中年の堅実と幼い時代のはしやいだ陽気さ！ しかしそのモデルに迫いつくためには、カンパスを捨てざるをえないのではないでしょう。か。ルソーはあえてジュリーを選んだ、彼は彼女を描こうと試みた。彼は熱狂を錯乱状態にまで導いた。しかし幾度となくルソーは、その主題の下でそれに達することなくとどまっている。」⁴⁾

ラクロは、「モデルがすべて画家の心の中にある」美しいロマンチックな小説を否定する。そこでは必要なのは、感受性と、「触れるものすべてを美化し、事物をそのあるべきように創る自由自在にこやかな想像力」であるが、これらは女性にのみ属する。しかし「より厳しい仕事を強いられた男性は、自然を忠実に描き出した時、いちばんよい仕事をしたことになるのです！」⁵⁾

このようなラクロの批判は当時の小説の一般的傾向に対してまさに適切であろう。感傷的な愛情の吐露や観念的な美德の讃美にあふれ、ルソー的な反抗精神は皆無である「新エロイズ」の模倣的作家たち。さらには、この世紀を特徴づける「サンシビリテ」の小

説。ラクロは彼が否定する「やさしい感情」と「美化された自然」の小説の例として、往復書簡の当の相手であるリコボニ夫人の「エルネスチヌ」「ファニー」「カテスビー」を挙げている。彼女はまさに当時の小作家の中で、「サンジビリテ」の傾向の代表的な一人であった。^(?)

「新エロイズ」は、尊敬されながらも、ラクロの文学観とは相いれなかった。彼は、自分はいくまでも現実を描いたのだ、とくり返し主張する。しかも、それは現実を無自覚的に写しとったのではない。典型を描いたのだ、と云う。メルトイユ夫人は存在しないかもしれない。しかし彼女の行為を分解すれば、その一つ一つは「毎日行われている現実」である。攻撃すべき現実の諸要素をある典型的人物に集結させる、というラクロの小説構成法は、時代の趨勢とは逆に、リアリズムの方向を指示していると考えてよい。

- (1) D. Mornet 編 La Nouvelle Héloïse. Introduction P. 300
その他、この小説の一般的な相違は Seylaz op. cit. pp. 23-4 参照

- (2) Pléiade p. 521.
- (3) Mornet op. cit. p. 285.
- (4) Pléiade p. 695.
- (5) Pléiade p. 688.
- (6) cf. G. Saintsbury : A History of the French Novel
vol. 1 (1917 London) pp. 432-6.
- (8) Pléiade pp. 687, 690, 691, 697.

ラクロがいつごろからこのような文学観を持っていたかは明らかではない。「新エロイズ」が公刊されたのは一七六一年、ラクロ二十才、野心にもえた青年である。文学的には詩作の時代がはじまるが、そこには後年のラクロやルソーと相通じるものを見出すことは困難である。一七七七年に、のちに否定することになる「エルネスチヌ」に依って同名のオペラの台本を書いていることを考えると、彼が自分の方向を定めたのはそれよりも後のことと推測される。オペラのはなはだしき不評も一役買っているかも知れない。また、ヴァイヤンの指摘するように、アメリカ独立戦争に直接参加できずに、昇進と行動への最後の希望を断たれた幻滅とも無関係ではないかもしれぬ。図式的には、ラクロが現実体験を深めた過程は、思想的にはルソーによつて疎外の意識を明確にした過程であり、文学的にはリアリズムへと傾斜した過程である、という仮説が考えられるが、それを実証する能力をわれわれは持たない。しかし、ラクロのさまざまな主張を綜合するならば、「危険な関係」を書くにあたって、「新エロイズ」が一つの否定的契機的作用を担っていたことは、ほぼ確実である。「女性論」においてルソーの弟子であるラクロは、「危険な関係」においては自ら選んでアンチ・ルソーの方法を採ったのである。

何故ラクロが小説においてルソーと反対の道をとったか、を明確にすることはきわめて困難である。彼らのパーソナリティの差はもちろん考えられてよい。夢想的自己没入はラクロの性格とはあいいない。ラクロの思想が、肯定的理想的な要素を發展させる素地のないものであることは、すでに触れた。また、「新エロイズ」や

その垂流のような美しい小説においては、彼の現実不満を決してあらわすことはできないことを彼は知っていたであらう。ラクロに残された方法は、否定するべきものを否定として、没我的に描くことであつた。ルソーの「創造」の原理と対比するならば、さらに、次のような考察も可能である。「自然の模倣」を基本とする芸術観が根強く残存している中であつて、ルソーに「創造」の実践をさせたものは、自分が何人とも同じでないと信ずる自己意識、反社会、反文化主義をつらぬく自己意識であつた。ラクロが強烈な反社会意識を持つてゐることはくり返し述べた。しかし、それは彼の現実不満がルソーによつて思想的表現をとりえたとどまり、自己の全存在をゆるがすような特異性の意識や特別な使命観をラクロは持たなかつたと考えてよい。「女性論」第一部と第二部でルソーに劣らぬ急進性を示したラクロも、第三部で文化観念にふれると意外に平板であり、ルソーの徹底した価値転換の主張からは遠い。ルソーとダランベールの演劇論争については、作者の技巧の巧拙と読者の精神が問題であつて、このうち一つの条件が満足されるならば危険ではなく、彼らの対立は見解の相違にすぎない、というのがラクロの解釈である。(F. P. 455) 伝統的価値観が強力に残存しているこれらの分野においては、ルソーに比べると、ラクロはかなり文化主義的であり、また、古典主義的抑制も働いてゐると考えられる。このことは、つねに賞讃される「危険な関係」の完成度と関係している。

「新エロイズ」においては、現実社会と密着したアクチマアルな部分は、理想的な恋物語の本筋とは異質のものとなつた。没我的

な「危険な関係」では、作者は、「女性論」にみられる思想内容を、ごく一部分しか盛ることができなかった。もし作家の思想的自己主張がより全面的にこの小説に投入されていたならば、小説の混乱は避けられなかつたであらう。第八十一信に対する多くの批評がそれを証している。ともにこれらの小説の過渡性を明らかに示していると言えよう。

過渡性はラクロの思想にも認められる。彼は絶対的思考をすでに離れていたが、歴史的思考を自己のものとするには至っていない。社会は理想的「自然」と対比して一括して扱えられ、現実とは歴史的過程としては把握されない。だから一種の決定論の中で支配されて、現実の全面的転換を待ちのぞみながら、未来のイメージは生まれないし、相対的に自由な立場を獲得することもできない。ラクロは時代を十分に見定めたとは云えないであらう。しかし、われわれは一七八二年という時を忘れてはなるまい。その時代に生きたラクロは答えるであらう。「その描写は陰気なものです。それは認めます。しかしこれは真実である。」⁽²⁾

(63・9 63・10)

- (1) R. Vailland p. 7.
- (2) Pléiade p. 697.